



宮城学院女子大学の地域連携・ 産学連携の現状と今後の展望

宮城学院女子大学地域連携センター 副センター長 平本福子

女性教育の伝統とともに

宮城学院は1886年（明治19年）に宮城女学校として創立され、まもなく130周年を迎えます。その後、1980年（昭和55年）には、仙台市中心部から、現在の桜ヶ丘地区に移転しました。初夏の桜ヶ丘キャンパスは、レンガ校舎の赤茶色と木々の鮮やかな緑色とのコントラストが美しく、豊かな学び舎にいることを実感します。

本学の建学の精神は、「福音主義キリスト教の精神に基づき、神を畏れ敬い、自由かつ謙虚に心理を探究し、隣人愛に立って、すべての人の人格を尊重し、人類の福祉と世界の平和に貢献する女性を育てる」です。そして、これらの建学の精神のもと、130年にわたって宮城・東北の女性教育をすすめてきました。

歴史を振り返ると、本学の女性教育の伝統は、時代の変化にあわせて進化することにより育まれてき

2016年、宮城学院女子大は変わります！	
現在の学部・学科	新学部・学科 ※現代ビジネス学部は設置認可申請中
発達臨床学科 (80名)	現代ビジネス学部 現代ビジネス学科 (95名)
児童教育学科 (50名)	教育学部 教育学科 (170名)
食品栄養学科 (100名)	生活科学部 食品栄養学科 (100名)
生活文化デザイン学科 (70名)	生活文化デザイン学科 (60名)
日本文学科 (90名)	学芸学部 日本文学科 (100名)
英文学科 (90名)	英文学科 (70名)
人間文化学科 (90名)	人間文化学科 (70名)
国際文化学科 (90名)	心理行動科学科 (60名)
心理行動科学科 (50名)	音楽科 (25名)
音楽科 (35名)	

ました。2016年には創立130周年を迎えるにあたって、「ヒラケ！ミヤガク」のキャッチフレーズとともに、新たな伝統の1ページを拓くことになりました。

本学は、現在、1学部（学芸学部）10学科（英文学科、日本文学学科、人間文化学科、国際文化学科、心理行動科学科、音楽科、発達臨床学科、児童教育学科、生活文化デザイン学科、食品栄養学科）で約3000人の学生が学んでいます。

来年度には、学部構成を学芸学部（英文学科、日本文学学科、人間文化学科、心理行動科学科、音楽科）、教育学部（教育学科幼児教育専攻、児童教育専攻、健康教育専攻）、生活科学部（食品栄養学科、生活文化デザイン学科）に再編し、専門領域毎にまとめることにより、教育の充実を図ります。また、新たに現代ビジネス学部（現代ビジネス学科）（現在、文部科学省申請中）を創設し、女性の視点から地域のビジネスを創造できる人材の育成に取り組む予定です。

地域連携の拡がり —地域社会の教育力—

大学が地域の知の拠点であることは改めていうまでもありませんが、近年、多くの大学が地域連携を推進しています。これらの背景には、それぞれの大学が地域社会での存在力を高めたい、学生の社会人



宮城学院女子大学全景



大学キャンパス

基礎力を育てるために地域社会の教育力を活用したい等、大学側のニーズがあります。また、地域社会も、大学がもつ英知を地域の発展に活かしてほしい、若者の参加により地域を元気にしたい等、大学への期待があります。

本学では地域貢献・地域連携として、生涯学習講座や公開講座を開催してきました。また、学生たちはゼミやボランティアで地域と関わってきました。一方、このような従来型の地域連携であった本学が、積極的に地域連携を進めようと動き出したのが、2010年の「リエゾンアクションセンター」（通称MG-LAC）の設置です。リエゾンとはフランス語で“つなぐ”という意味ですが、まさに人と人、地域と大学が“つながる活動”をしようというものです。

リエゾンアクションセンターは、本学が文部科学省大学改革推進事業（2010）に「就業力を支える『役割感』の育成」として採択されたことに始まります。本事業は、地域と連携した活動に学生が参加することを通して、就業力の基盤である「人の役に立つ」という役割観を育てるものです。そして、この事業の拠点として、リエゾンアクションセンターを設けました。また、学生たちが立ち寄りやすいように、講義棟のオープンスペースに設置し、担当職員を配置しました。



リエゾンアクションセンター (MG-LAC)

誠実で地道な活動 —宮城学院らしさ—

このような環境整備により、学生たちがアクティブ・ラーニング（課題解決学習）を通して、地域社会にかかわる活動が増えてきました。それらの取組をみると、学生たちは自分の専門分野にとどまらない多様な活動を展開しています。なかでも、東日本大震災による復興ボランティア活動には、多くの学

生・教職員が参加し、現在も活動を継続しています。例えば、震災直後には仙台市街路上でのミニコンサート、仙台市内小学校仮設校舎での学習支援、「食のほっとタイムプロジェクト（石巻市立病院スタッフへの昼食支援、保育所の給食や小学校の学外活動のためのお弁当支援）」等に、誠実に、かつ丁寧に取り組む学生の姿がありました。



「食のほっとタイムプロジェクト」いざ、石巻に出発！

その後は、石巻市立大原小学校での学習支援、病院や高齢者施設での音楽会、仮設住宅での食事作り講座等、地道ではありますが活動を継続しています。



石巻市立大原小学校でのミニコンサート

また、本学では学生たちの自主企画による活動を応援するために、活動資金を支援する仕組み（さなぎプロジェクト）も設けています。

例えば、学食を「もっと楽しく、もっとおいしく」するためのメニューを考えたり、利用者調査を行ったりするグループ（楽食プロジェクト）、宮城県立子ども病院の患者や家族の方々が利用される「ドナルド・マクドナルド・ハウス仙台」でお菓子作りをするグループ（Heartful Sweets）、学外の団体と連

携し国際支援活動（フェアトレード等）を行うグループ（Triangle）等、学生自身で企画・実施・成果確認・次の活動へのPDCAサイクルを体験する活動が広がっています。学生たちは互いに知恵を出し合い、時には失敗しながらも、失敗を糧にして成長していきます。



「Triangle」途上国とのフェアトレード商品の販売

リエゾンアクションセンターによるこれらの活動に参加する学生は、年間で延べ約1000名で在学生の1/3にもなります。

地域連携センターの設置 —産官学連携へ—

リエゾンアクションセンターの開設により、学生たちが地域に出て活動する取組が増えてきました。また、それぞれの教員による地域活動も従来通り行われていました。そこで、これらの地域連携活動を全学的な事業として展開していくために、2014年4月に組織再編を行い「地域連携センター」を設置しました。そして、地域連携活動の枠組みを、①生涯学習等各種講座開催、②学生によるプロジェクト活

動（リエゾンアクションセンター）、③産学官連携事業としました。

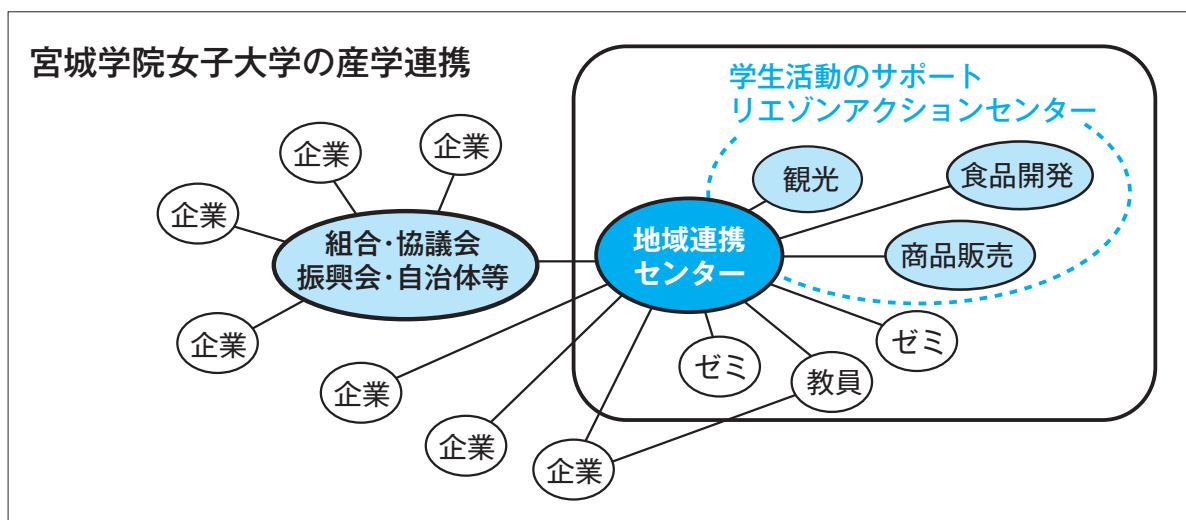
その後、地域連携センターの開設により、地域と連携した活動が増えるのに伴い、企業や自治体との連携も進んできました。2014年には河北新報社、2015年には仙台市や仙台フィルハーモニーと連携協定を結びました。

河北新報社との連携では、社員の方に1年次「基礎演習」で新聞の活用についての講義を担当していただいています。また、本学は教員総動員で河北新報朝刊のコラム「食の泉」（毎日連載）を担当しています。また、仙台市とは、男女共同参画事業への参加、大学生の健康・食生活課題についての共同研究を実施しています。さらに、仙台フィルハーモニーとは、音楽科がある本学ならではの連携です。本学では本学らしい教育科目群（MGUスタンダード）を設け、全学生に音楽科目「音楽の世界」を開講しています。仙台フィルとの連携は、学生への教育環境づくりになっています。

地域企業との連携—女子力の価値—

地域企業との連携は、今まで食品栄養学科の学生・教員による、駅弁、コンビニ弁当、おにぎり等の商品開発にとどまっていた。ところが、地域連携センターという産学連携の窓口を設けたことにより、地域の企業の方々から声をかけていただくことが多くなりました。

例えば、「たびのレシピ」とのプロジェクトでは、それぞれの学生が自分が行きたくなるような旅行プランを企画しました。旅行会社の業務を学び、プロのアドバイスを得ながら旅行商品を提案することは、学生にとって貴重な経験となりました。また、



企業からも、若い女性が等身大の目線で企画した旅行プランには、新鮮なアイデアがあるとの評価をいただきました。



「たびのレシピ」の方からのアドバイスを受けて

作並温泉組合との連携プロジェクトでは、学生たちは温泉街を歩いて、作並温泉のよさを探索しました。また、有馬温泉での学生参画プロジェクトの視察を通して、旅館の方々との関係づくりも進みました。現在は、作並スイーツづくりに向けて、試作・検討を続けています。

若い女性が集まる女子大には、食品企業からの連携要請が多くあります。

大正製薬・電通・宮城テレビとのプロジェクトでは、女性向き商品（リポビタンフィール）のプロモーションを行いました。商品情報のレクチャー、学内でのマーケティング調査、調査結果のプレゼン、テレビでのプロモーションを学生が行いました。

大正製薬×電通×宮城テレビ

若年層にリポビタンfeelを知って、好きになってもらい、他の人にも広めてほしい！



スイーツは女子学生の得意中の得意。ローソン・山崎パン・仙台放送とのプロジェクトでは、学生たちが開発した商品（「もちもち食感のしそ巻風味のパン」、「わけあいっこけーき」）が東北六県のローソン店舗で発売され、好評を得ました。

ローソン×山崎製パン×仙台放送



もちもち食感の
しそ巻風味のパン

価格：120円
販売個数：5,457個

わけあいっこ
けーき

価格：238円
販売個数：12,568個



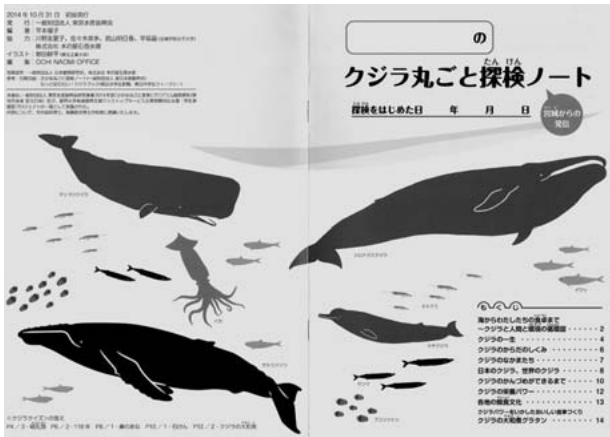
東北ドリームコレクションでの販売促進にも参加

木の屋石巻水産とは、若年層を含む多世代に食べてもらえる鯨缶詰の開発に取り組みました。連携する企業や商品のコンセプトについて、十分に情報を入手した上で、新商品の試作・検討を重ね、鯨のトマト煮を提案させていただきました。

また、宮城の伝統である鯨食文化を次世代に伝えるための食育教材づくりも、共同制作しました。生産・加工企業との連携では、新商品を開発することだけでなく、食育等の企業の地域貢献活動にも学生たちの専門性が活かせることがわかりました。



木の屋石巻水産との試作品の検討会



共同制作した食育教材「クジラ丸ごと探検ノート」

楽天球団とコラボして、お弁当の企画も行いました。楽天イーグルスの鷲にかけて、「あなたのハートをワシづかみ」弁当です。トンカツをのり巻きにして、手で“カツ（勝利）”を“わしづかみ”しようというもの。このような楽しいアイデアは、学生ならではのものです。ハートの厚焼き卵も、真ん中で主張しています。そして、アイデアのおもしろさだけでなく、味や食材へのこだわりも重要です。

また、掛け紙のデザインも学生たちが行いました。宮城学院の象徴である、帽子の像のシルエットと萩のイラストが本学を表しています。さらに、手描きのリーフレットが、この弁当に込めた思いを伝えています。女子学生の手描きイラストには、“女子力”が溢れています。

製造して下さった弁当業者（こばやし）の方には、いろいろご協力いただきお世話になりました。無事に、約1時間で200個が完売しました。



また、毎年、本学の夏のオープンキャンパスには学生たちが企画した弁当を、高校生や保護者にお配りしています。今年も8月2日（日）のオープン

キャンパスに向けて、“おにぎらず”弁当の試作を重ねているところです。

このような食品開発の取り組みでは、本学の卒業生が相手先企業の担当者である場合が多々あります。楽天弁当もオープンキャンパス弁当も、本学の卒業生が後輩の学生に、あたたかく、厳しくアドバイスしてくれています。130年の歴史は、さまざまな場で現役生を支えてくれています。

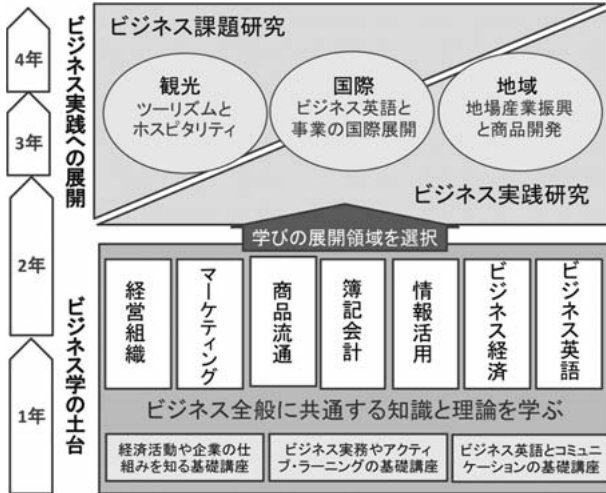
これらの産学連携にはリエゾンアクションセンターで進めてきた、学生サポートシステムが機能しています。学生たちは学科の垣根を越えて、さまざまなプロジェクトに参加しています。最近の学生は地域や企業との連携活動に積極的なので、教職員が学生をどのように指導・支援していけるかがポイントです。また、仙台市産業振興事業団等の地域の企業を紹介していただける機関との連携も大きな力となっています。

現代ビジネス学部の創設 —産学連携の強化—

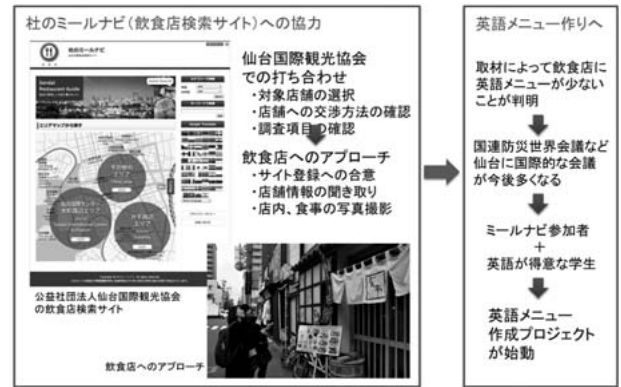
本学は「現代ビジネス学部・現代ビジネス学科」を2016年4月の開設に向けて準備をしています。現代ビジネス学部では、ビジネスに必要な幅広い教養と実践力をベースに、宮城そして東北の豊かな資源をいかして新たな価値を創造できる、魅力ある人材を養成したいと考えています。女性が活躍する時代といわれて久しいですが、まだまだ道半ば。今ほど実力とハートをもった女性の育成が求められている時代はありません。

現代ビジネス学部の教育の特徴は以下の4点です。①女性ならではの感性をいかした、地域発展へとつながる学習—地域発展の重要な要素であり、女性ならではの感性をいかしやすい分野のビジネスを専門的に学びます。②観光・国際・地域の3つの展開領域—ビジネスの知識を土台として、観光（ツーリズムとホスピタリティ）、国際（ビジネス英語）、地域（地場産業振興と商品開発）を選択し、理論と実践の両面から学びます。③地域や企業と連携する「プロジェクト型教育」の充実—地域の自治体、企業等と連携したさまざまなプロジェクトを実施します。④基礎から応用まで充実した英語教育—実践力重視で楽しく学べる授業を通じて、ビジネス英語の基礎を身につけるとともに、英語を使ってのプロジェクト学習を行います。

現代ビジネス学科の教育内容



「杜のミールナビ」制作→英語メニューづくり



現代ビジネス学部では、ビジネスに関する基礎的な学習を土台にして、産業界等と連携した、実践的なプロジェクト型の学習を行います。このプロジェクト型学習は、現在、本学で行っている産学連携の取組みをベースにして発展させていくこととなります。

観光+国際の例をひとつあげると、仙台市内飲食店の英語メニューづくりです。昨年、仙台国際観光協会からの依頼を受け、飲食店検索サイト「杜のミールナビ」づくりに関わらせていただきました。学生たちは、飲食店を1軒1軒まわり、メニュー等の情報を集めました。その後、活動に参加した学生たちは、取材を通して、英語のメニューが少ないことに気づき、仙台の国際化には英語メニューが必要ではないかという思いをもちました。そこで、本年度は英語が好きな学生たちが集まり、英語メニュー作成プロジェクトが動き出しています。

現代ビジネス学部の創設は、宮城学院の女性教育の歴史の中で新たな挑戦です。しかし、約6万人の卒業生の中にはビジネス界で活躍しておられる方も多く、応援エールを送ってくれています。また、前述したように地域課題に取り組む学習や産学連携の実績も蓄積されてきました。

地域の企業等のみなさまには、本学の産学連携の発展に向けて、よろしくご協力いただけますようお願いいたします。

■宮城学院女子大学地域連携センター

・宮城学院女子大学HP：<http://www.mgu.ac.jp/>

・宮城学院女子大学地域連携センターHP：

http://www.mgu.ac.jp/main/regional_liaison_center/index.html

・住所：〒981-8557 仙台市青葉区桜ヶ丘9丁目1番1号

・電話：022-277-6138 (担当：亀谷)

・FAX：022-279-5876

・E-Mail：liaison@mgu.ac.jp